Japanese Association for Religious Studies

的信頼は、「お任せ」という在り方に優れて表れる。「わたしが治すのではない」、つまり、自我（Ich）を頼みとはしないのだ。

実践面で祈禱と精神療法共に、相当の実効性が認められるなら、効力の源となる更なる共通の或いは近似の基盤として〈場〉の力に着目したい。要するに、genius loci とは、「力」である。〈臨床の場〉に生じている事態の優れた言語化として「主客の融合」がある。Searles が懸命に忌避した、自（我のからだ）と他（環境）の融合は、熟達の〈臨床の場〉では、不安を解きほぐす護りとなり、それが癒しの力へと連なっていくのである。

パネルの主旨とまとめ

戸田　游晏

日本仏教は、印度から東アジアを経た思潮が、土着の心性と融合して形成された。仏典にない「山川草木悉皆成仏」が重要な仏教思想として流通することに、これが現われている。だが、諸物に魂を認めつつ森羅万象と対等に付き合うのは、ジャイナ教・原始仏教発祥の頃よりのエートスでもあった。仏の教えに出会った人々は、洗練された哲学的教理にではなく、万物との共生観に感応したのではなかったか。

杉岡はジャイナ教の、六生類を平等とし、共に生きる生命観を示した。これをアニミズム（人間中心主義からの進化論）で解釈するのは誤謬である。なぜなら、六生類はいずれもが霊魂（jīva）を有するがゆえに平等であり、人の心の映り込みではないからである。

永原は、世界的に注目されるバイオリージョナリズムが日本人にとっては元より馴染み深いとする。「山姥」をはじめ能には、人と対等に対話する自然の有り様が見て取れる。新作能には、「無明の井」（臓器移植問題）「原子雲」（広島原爆犠牲追悼）等がある。宗教学には、自然との対話を取り戻す方策を探る課題があるのではないかと提案した。

いまや、事故で漏れ出した放射性物質との「共生き」は避けられない。馴染み深い「心の内側」の探求を超え出ない限り、定め論となり現状の追認にとどまる。その対極と見做されがちな「エンゲージ」運動への傾斜もまた、精神の物質支配に再び近づきかねない。

實川は、物質との関係は、「お互い様」での共存が本来だとした。自然への支配をはかる科学技術は仮面をつけた「一神教」であり、物質は力ある祟り神として祀り上げてこそ相応しいと提起した。放射能を「超越」領域と見るのでは、一神教の延長だという。

祀りに類する民俗宗教事象に関し、癒しや救いの実効性を参照する研究は殆ど行われていない。これは近代宗教学での、プロテスタント由来の内面主義の墨守を示す。戸田は、自然との対等な付き合いの一つで加持祈禱と総称される宗教的治療や仏道の営みに、場（環境）の力の機能を鑑みつつ、臨床実践方法論との対比を試みた。

コメンテータの森岡が、人中心のモノ・物質への関わりに反省を徹底し、古代の知と行から学ぶ時機を迎えていると評した。災いと同時に力をもらうダイナミズムが行の根幹で、臨床

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の営みの母体も祈りにある。これが震災後の、命の回復を齎す力になり得るとした。また、物質とモノとの錯綜また用語の使い分けへの留意を促した。

津城寛文氏からの、我々は専ら翻訳語でものを考えるが、古語と翻訳語との中間辺りで語るのがよいとの感想があった。實川は、現代思想等の誤訳・悪訳がむしろ防波堤となり我々の文化を守っていると、翻訳(語)の再評価を示唆した。また津城氏は、人を傷つけない最低限の倫理が宗教者・研究者に課されないかと問い、杉岡を交えた談義となった。

西尾秀生氏からの問いを受け、杉岡は、ジャイナ教と仏教では、ジーヴァ観と識主体の教義に異なりがあると述べた。また長谷千代子氏から、霊魂は、物質と同等に並べるべきでなく、場の中に生ずる特別な係わりのことではないか、ある文脈の中での出会うことが、別の広がりを持つ場を作り出すとの示唆を戴いた。

寺尾寿芳氏からは、物質と霊魂の分割はギリシャ的発想でありヘブライでは分けない、キリスト教批判は専らギリシャ的なものに向けられるが、ヘブライ世界については批判以前に理解が成されておらず、幅広いキリスト教理解が求められるとの教示を戴いた。

発災後、未体験の環境に、わたくしたちの生老病死は既に包み込まれている。自然界の循環に新たな物質が混じり佐須良ひ巡りはじめた。これらが、早晩生じるべき科学者間のパラダイムシフトを超え、集合（意識）概念の突然変異を齎すこととなるかもしれない。

公共空間における宗教的ケアのあり方
――「臨床宗教師」の可能性――

代表者・司会　高橋　原
コメンテータ　鈴木岩弓

ケアにおける宗教性再考

高橋　原

東日本大震災以来、悲嘆を抱える人々の心のケアにおける宗教者の存在意義が再評価されてきている。在宅緩和ケアを専門とする岡部健医師は、死の問題に直面した人々に対して神仏などの超越的存在や、死後の魂の救済などに踏み込んだ心のケアのために、医者とともに現場に入る公共性を備えた宗教的専門職が必要であると提言している。本発表では、事例を参照しながら、宗教者が公共空間で行なう心のケアにまつわる諸問題を考察する。

宗教者が行なう心のケアを考える時に、「宗教的ケア」と「スピリチュアルケア」との区別が有効である。前者は宗教者が特定宗教の方法に従って提供するもので、予め答えが用意されている。ケア対象者がケア提供者の宗教の価値観を受入れることによって成立する。一方、後者はケア提供者（宗教者とは限らない）がケア対象者の価値観を受入れることによって成立し、対象者の心の動きへの寄り添いと自発的な気づきが重視される。

スピリチュアルケアが人間の健康にとって不可欠なものとし

NII-Electronic Library Service